



「ひとはりべえ」してまち自慢

新国 勇

小学生のころ、「ひとはりべえ」だった。子どもが人まえで、はしゃいだりさわいだりするのを只見方言で「ひとはりべえ」という。漢字で表記すれば「人張り兵衛」。幼い自己主張のようなものといえる。来訪者があり、でしゃばってさわぐと、「ひとはりべえしてんでねえ」としかられる。いまは想像もできないが、そんな幼少時代があった。しかし、「ひとはりべえ」は、場合によってはよい効果がでると思うことがある。

文化財のシンポジウムや講演会にたびたび招かれる。只見町教育委員会にいたころおこなった民具整理をテーマとしたものがおおい。唐箕や千歯こきなどの用具類を整理して保存する方法が「只見方式の民具整理」として各方面から注目されているからだ。40年まえにしたことが、いまごろどうして話題になるのか。それは、「ひとはりべえ」の遺伝子がはたらいた結果かもしれないと考えている。当時、民具をクリーニングして整理し、台帳カードに記録するお年寄りたちのようすを広報紙や新聞、テレビなどに情報を提供して大きく取り上げてもらった。講習会や講演会もひんぱんにおこない、文化祭ではその成果を展示した。小中学校の総合的な学習の教材にしてもらい学習発表会で報告してもらったこともあった。研究者や専門家が来町すれば、首長はじめ町幹部に会ってもらい、民具整理活動の重要性を語ってもらった。このようなアクションをつづけた結果、住民から首長にいたるまで民具という民俗文化財が浸透し

て認知度がたかまり、その価値が認められるようになった。それは、ひとえに情報発信と啓発の成果だったといえる。ひろく理解されるようになると、行政の予算もつきやすく博物館の開館まで順調にことが運んだ。講演会の質疑応答で「只見町はどうしてそこまでやれるのか」「予算がつかない」「専門的な人材が配置されない」という質問がよくある。そうになってしまうのは、情報発信と啓発が足りないからではないか、と答えている。担当者や担当部署がわかっているだけでは、なかなか^{もち}あかない。住民、職員、議員、首長にむけて、つねに情報を発信しつづけて納得させるアクションがたいせつなのだ。そして、みんながおなじ意識をもつようになったとき、すすむべき方向が見つかる。

絶滅危惧種のユビソヤナギが伊南川で発見されたときもおなじことをした。マスコミへの発信、シンポジウムや講演会の開催、総合的な学習への教材提供、パンフレットや報告書をつくり関係方面に発送するなどを繰り返した。いまでは伊南川流域の住民でユビソヤナギを知らない人はいなくなった。マイナーな水辺の樹木だが、もはや河川管理者も無視できない存在となっている。

自分をひけらかす「ひとはりべえ」は、猫も相手にしない。しかし、自分のまちを誇る「ひとはりべえ」は、積極的にするべきだと思う。ただし、単独での行動は効果が小さい。共感する仲間を増やし、関係する人や組織を巻き込みながら粘り強く「ひとはりべえ」を続けていけば思いはきっとかなう。

活動報告 2025年1月～12月

1/13	全国ガンカモ類の生息調査	滝湖・只見湖	6名
1/18	新年会	駅前旅館 只見荘	19名
2/10	「学ぶ会通信」vol.20	発送	5名
3/22	太田祥作さん講演会	民宿ふる里	17名
5/10	春の植物と野鳥観察会		10名
	終了後、定例会(叶津番所)、昼食会(ひよっこ)		
6/28	集落めぐり③一塩ノ岐		15名
6/28	第25回定例総会、懇親会	只見スキー場・レストランやまびこ	11名

8/23	暑気払いバーベキュー	奥会津ただみの森キャンプ場	25名
11/9	集落めぐり④一福井		6名
11/11	『学ぶ会通信 合本』	発送	5名
花暦調査2025年 季の郷湯ら里周辺			
5/15	6名、6/9	4名、7/5	11名、8/9
9/9	6名、10/4	7名、11/4	3名 計7回のべ50名
〈発行物〉			
2/10	「学ぶ会通信」vol.20	A4判 16頁	
10/31	『学ぶ会通信 合本 vol.1 2007.9.25～vol.20 2025.2.10』	A4判 本文 258頁	

「季の郷湯ら里周辺」調査報告

高原 豊、高原郁子

2013年からほぼ毎年、会員の皆さんと一緒に、場所を変えながら、環境省の里山モニタリングサイト1000の植物調査手法を用いて花暦を作成しています。2013～2022年に只見町内9カ所(奥会津ただみの森キャンプ場、要害山、^{はなごよみ}季の郷湯ら里(以下、湯ら里)周辺、蒲生岳山麓、癒しの森、黒谷林道、寄岩林道、楡戸沢林道、会津朝日岳登山道)で調査を行いました。調査を開始してから10年となった2023年から、同じ場所を再び調査して、その後の変化があるのかなのか調べています。2025年は2015年に調査した湯ら里周辺で2回目の調査を行い、その結果をとりまとめましたので報告します。

調査では、積雪がない5月～11月に、毎月1回、同じコースを歩いて、つぼみ・花・実をつけている植物を見つけて名前を記録しました。その場で種名が分からないものは標本を採り、持ち帰って同定しました。シダ類は発見時に名前が分かるものだけ、同定が難しいイネ科、カヤツリグサ科、スゲ属、コケ類・栽培種は原則として調査対象外としています。

2015年の調査と同じく、湯ら里(只見町長浜地内)の敷地内から比良林公園(只見町大倉地内)までの約2.7kmの林道・遊歩道を歩いて調査を実施しました(図1)。標高は概ね450mから500mの全体としては標高差が少ないならかなコースですが、余名沢から元野鳥観察の森へのルートが刈り払いされていないため道が荒れて分かりにくくなっていました。湯ら里や比良林公園の人工的な草地、池、水田、スギ植林地、多数の樹種からなる広葉樹林、ブナ二次林、



図1 調査コース 国土地理院地図(<https://maps.gsi.go.jp/>)を利用

開けたミズナラ林、放棄水田跡の湿地、クレー射撃場跡の土壌が発達していない広場などがあり、人の手の入り方が様々で多様な植生がありました。

調査には、のべ50名の方(平均7.3名)に参加いただきました。前回調査時はのべ36名でしたので、参加者が4割も増えました(表1)。人数が増えると見逃しが減りますので、心強い限りです

調査の結果、229種が確認され花暦にまとめました(表2)。前は231種が確認されていますのでほぼ同数でした。5月の調査日が、前は6日でしたが今回は15日だったためか、カタクリなど春植物の花が確認できませんでした。

月ごとに花が咲いていた種数を数えて、前回調査と比べてみました(図2)。昨年調査の要害山と同じように、5月に花が咲いたものが前回の2.3倍と大幅に増加しています。6月と7月は前回調査とほぼ同数でしたが、8月と9月は減り、10月は少し増え、11月はほぼ同数でした。2025年は雪が遅くまで降り雪解けが遅かったのですが、その後の気温は高く、8月は猛暑が続き9月もなかなか気温が下がりませんでした。その影響で開花時期が変化したり、開花しなかったりしているのではないかと推測されます。地球温暖化の影響は野生植物の開花周期にも及んでいるようです。

確認された植物のうち、日本海側に特有なものや保護したい植物は28種と前回調査と同数でした(表3)。前回調査

表1 調査日と参加者

調査日	天候	人数	調査者氏名
5/15	雨のち曇り	6人	遠藤菜緒子、高原郁子・豊、濱口徳江・善博、渡部和子
6/9	晴れ	4人	大宮明、高原郁子・豊、新国勇
7/5	曇り	11人	大宮明、貝津裕美子・好孝、高原朗・郁子・豊、新国勇、星千絵・千文、向坂麻希、渡部和子
8/9	晴れ	13人	遠藤菜緒子、大宮明、高原郁子・朗・豊、中根瑞希、新国勇、濱口義博・徳江、本多一恵他2名、渡部和子
9/9	晴れ	6人	大宮明、高原郁子・豊、新国勇、本多一恵、渡部和子
10/4	曇り	7人	遠藤菜緒子、佐藤佳奈、志賀恵子・仁一、高原郁子・豊、新国勇
11/4	晴れ	3人	高原郁子・豊、新国勇
計7回 のべ50人			

表2 季の郷湯ら里周辺の花暦

種名	調査月	5	6	7	8	9	10	11
カタクリ								
フキ								
ショウジョウバカマ								
ツルアリドオシ								
スマレサイシン								
キクザキイチゲ								
ナガハシスミレ								
ヒメアオキ								
コハコベ								
オクチョウジザクラ								
コシノコバイモ								
スマレ								
ヒトリシズカ								
ハウチワカエデ								
センボンヤリ								
タムシバ								
サワグルミ								
ホオノキ								
オオイヌノフグリ								
アブラチャン								
キブシ								
クロモジ								
コナラ								
コハウチワカエデ								
タチツボスミレ								
アリアケスミレ								
ヒナスミレ								
マキノスミレ								
ヤマエンゴサク								
ヒメハギ								
チゴユリ								
ミヤマカタバミ								
スイバ								
オオタチツボスミレ								
コチャルメルソウ								
モミジイチゴ								
ムラサキサギゴケ								
エゾタンポポ								
キケマン								
タネツケバナ								
ノジスミレ								
ノミノフスマ								
ツボスミレ								
オキナグサ								
キュウリグサ								
セイヨウタンポポ								
サワオグルマ								
ヒメオドリコソウ								
ミツバツチグリ								
ヒメジョオン								
コマユミ								
ノゲシ								
フデリンドウ								
ハルザキヤマガラシ								
ウワミズザクラ								
ルイヨウボタン								
シャク								

種名	調査月	5	6	7	8	9	10	11
エンレイソウ								
ミヤマガマズミ								
ハイイヌツゲ								
ウゴツクバネウツギ								
オオバタネツケバナ								
ホウチャクソウ								
ヤブヘビイチゴ								
タニウツギ								
アカモノ								
タチシオデ								
トチノキ								
マムシグサ								
シロツメクサ								
オッタチカタバミ								
へらオオバコ								
オオバスノキ								
オオヤマフスマ								
オランダミミナグサ								
キショウブ								
キランソウ								
ギンリョウソウ								
ササバギンラン								
サラサドウダン								
タニギキョウ								
サワハコベ								
サワフタギ								
タチイヌノフグリ								
ハクウンボク								
ムラサキコマノツメ								
ラショウモンカズラ								
オニタビラコ								
コウリタンポポ								
ツルマンネングサ								
ハナニガナ								
ハルジオン								
ヤマツツジ								
ミズタビラコ								
ウラジロヨウラク								
ミヤマナルコユリ								
ヤマウルシ								
フタリシズカ								
オニアザミ								
コシジシモツケソウ								
エゾアジサイ								
イチヤクソウ								
ウワバミソウ								
ゼンマイ								
オオバクロモジ								
オニノヤガラ								
クマイチゴ								
サルトリイバラ								
ガマ								
オオチドメ								
キツネノボタン								
オオバコ								
アリノトウグサ								
イワガラミ								

■ つぼみ
■ 花
■ つぼみと花
■ 実
■ 花と実
■ つぼみと花と実
■ 胞子葉

種名	調査月	5	6	7	8	9	10	11
ウツギ				花				
カナビキソウ			花					
クモキリソウ			花					
コナスビ			花					
ミヤコグサ			花					
トウバナ			花					
ノコンギク			花				花	実
ウツボグサ			花		実		花	
ウメガサソウ			花		実			
ミヤマトウバナ			花		実		実	
ドクダミ			花	花				
トンボソウ			花	花	実			
ムラサキツメクサ			花	花	花	花	花	花
トリアシショウマ			つぼみ		実			実
ムラサキシキブ			つぼみ		実			実
ハナヒリノキ			つぼみ		実			実
ウマノミツバ			つぼみ		実			
ハエドクソウ			つぼみ		実		花	
ノアザミ			つぼみ		実			花
トウギボウシ			つぼみ		花			
トチバニンジン			つぼみ					
クサレダマ			つぼみ					
ニガナ			つぼみ					
ホナガクマヤナギ			つぼみ					
オカトラノオ			つぼみ		実			
コバノフユイチゴ			つぼみ		実			
モミジガサ			つぼみ	実	実	実	実	実
エノコログサ				実				
クリ				実				
クロウスゴ				実				
ケアブラチャン				実				
シオデ				実				
ミツバ				実				
ヤマサギソウ				実				
エゾユズリハ				実				
サワオトギリ				実				
ミゾホオズキ				実				
エゾノギンギシ				実				
アカソ				実	実			
ザクロソウ				実	実	実		
キンミズヒキ				実	実	実	実	実
オオヤマサギソウ				実				
ネジバナ				実				
ヒメナミキ				実				
イタドリ				実	実			
ヤマノイモ				実	実	実	実	実
ヌスビトハギ				実	実	実	実	実
オトギリソウ				実	実	実	実	実
クマヤナギ				実	実	実	実	実
メヒシバ				実	実	実	実	実
ミズヒキ				実	実	実	実	実
ゲンノショウコ				実	実	実	実	実
ユウガギク				実	実	実	実	実
ヒヨドリバナ				実	実	実	実	実
ツルリンドウ				実	実	実	実	実
ツユクサ				実	実	実	実	実
カタバミ				実	実	実	実	実
ノブキ				実	実	実	実	実

種名	調査月	5	6	7	8	9	10	11
コニシキソウ					つぼみ	実	実	
ヤマハギ					つぼみ	実	実	
クズ					つぼみ	実		
カラスビシャク					実			
ツルニンジン					実			
ウド					実	実		
オトコエシ					実	実	実	実
タムラソウ					実	実		
ミヤマウスラ					実	実		
カヤツリグサ						実		
キンエノコロ						実		
ミズタマソウ						実		
ヤマブキショウマ						実		
アクシバ						実		
コバギボウシ						実		
ノブドウ						実		
オオアレチノギク						実		
タチアザミ						実		
ヒメキンミズヒキ						実		実
チヂミザサ						実	実	実
ハナタデ						実	実	実
マツヨイグサ						実		
イボクサ						実		
ギンリョウソウモドキ						実		
サワヒヨドリ						実		
シロネ						実		
ススキ						実		
ミヤマイラクサ						実		
メドハギ						実		
エノキグサ						実	実	
ムカゴイラクサ						実	実	
ジャコウソウ						実	実	実
ヨモギ						実	実	実
ミゾソバ						実	実	実
ミヤマママコナ						実	実	
ツリフネソウ						実		
リンドウ						実		
アキノキリンソウ						実	実	実
キタコブシ							実	
ナツハゼ							実	
ヒメクグ							実	
ヨシ							実	
ゴマナ							実	実
アメリカセンダングサ							実	
イヌタデ							実	
ダンドボロギク							実	
タイリンヤマハッカ							実	実
ヒガンバナ							実	
ヒメシロネ							実	実
セイタカアワダチソウ							実	実
ミョウガ							実	
メナモミ							実	
オオヨモギ							実	
ホツツジ							実	実
アケボノソウ							実	
クロバナヒキオコシ							実	
ヤマシロギク							実	
合計	229種							

■ つぼみ
 ■ 花
 ■ つぼみと花
 ■ 実
 ■ 花と実
 ■ つぼみと花と実
 ■ 胞子葉

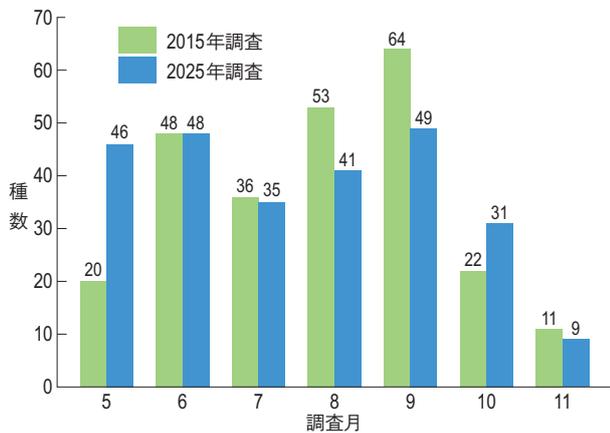


図2 季の郷湯ら里周辺における月ごとに花をつけた種数 2015年調査と2025年調査の比較

時はまだ指定されていなかった只見町の貴重動植物や掲載もれなど5種を追加しましたが、前は確認されたものの

中で今回は確認されていない植物が7種あり、花期がずれたため確認できなかったものや種の同定に疑問があるものなどありますが、3種（アカミノイヌツゲ、キソチドリ、アリドオシラン）は花や実を見逃したか、または消失した可能性もあります。福島県の絶滅危惧ⅠB類のオキナグサは健在でした。オオチゴユリは今回調査では花が確認できませんでした。オニノヤガラは確認できましたが前回調査時より数が減っているようでした。ナラ菌と共生しているため、生育地のコナラが伐採やナラ枯れで衰退している影響かもしれません。

調査で確認された警戒すべき外来種を表4にまとめました。キショウブが湯ら里の前庭にある池で生育しています。おそらく植栽されたものだと思いますが、繁殖力が強くて他の水辺の植物を駆逐してしまうので、できれば除去してノハナショウブやミソハギなどに換えていただきたいです。

表3 季の郷湯ら里周辺の特徴的な植物・注目すべき植物

種名	科名	日本固有	特徴等
オキナグサ	キンボウゲ科		準絶滅危惧(環境省)、絶滅危惧ⅠB類(福島県)
コシノコバイモ	ユリ科	●	準絶滅危惧(福島県)、只見町指定貴重動植物、日本海要素の植物
ウラジロヨウラク	ツツジ科	●	只見町指定貴重動植物
サラサドウダン	ツツジ科	●	只見町指定貴重動植物
カタクリ	ユリ科		只見町指定貴重動植物
ササバギンラン	ラン科		只見町指定貴重動植物、園芸的採取のおそれがある
タイリンヤマハッカ	シソ科		新潟県から東北南部の日本海側に生育。日本海要素の植物
オオバクロモジ	クスノキ科	●	北海道の一部と東北地方、日本海側の山地に多い
クロバナヒキオコシ	シソ科	●	北海道と本州の日本海側に生育
オクチョウジザクラ	バラ科	●	本州の日本海側に生育
ホナガクマヤナギ	クロウメモドキ科	●	本州の日本海側の山地に生育
トウギボウシ(オオバギボウシ)	クススギカズラ科	●	うるい。日本海側に生育
ヒメアオキ	アオキ科	●	日本海要素の植物
コジジシモツケソウ	バラ科	●	日本海要素の植物
エゾアジサイ	アジサイ科	●	日本海要素の植物
エゾユズリハ	ユズリハ科		日本海要素の植物
タニウツギ	スイカズラ科	●	日本海要素の植物
タムシバ	モクレン科	●	日本海要素の植物
ハイイヌツゲ	モチノキ科		日本海要素の植物
スマレサイシン	スマレ科		日本海要素の植物
クモキリソウ	ラン科		園芸的採取のおそれがある
ヤマサギソウ	ラン科	●	園芸的採取のおそれがある
オオヤマサギソウ	ラン科		園芸的採取のおそれがある
トンボソウ	ラン科		園芸的採取のおそれがある
ミヤマウズラ	ラン科		園芸的採取のおそれがある
アケボノソウ	リンドウ科		園芸的採取のおそれがある。湿潤地に生育する。まれ
イチヤクソウ	ツツジ科		園芸的採取のおそれがある
オニノヤガラ	ラン科		ナラタケと共生する。密度高く生育しているのは珍しい

前回確認されたが今回は確認されていない植物	オオチゴユリ、イワナン、ムラサキヤシオツツジ、キタコブシ、アカミノイヌツゲ、キソチドリ、アリドオシラン
今回確認されたが前は確認されていない植物	ウラジロヨウラク、タムシバ、ハイイヌツゲ
只見町指定貴重動植物に指定されたので追加した植物	サラサドウダン、カタクリ
前回掲載もれと思われるもの	エゾユズリハ、スマレサイシン、ヒメアオキ

前回と今回調査で確認されたりされなかったりした植物を表5にまとめました。このうち外来種は4種減って6種増えていますので、差し引き2種増となっています。特にコウリントンポポが定着して増えてしまわないか心配です。全体として、要害山と同じく3割程度の種類が入れ替わっています。本調査では、つぼみ、花、実を確認できた植物しか記録していないため、ブナのように、生育しているものの、今年は花も実もつけなかったので記録なしとなっているものもあります。一概には言えませんが、どこでも10年間で3割程度の植物が入れ替わるのかもしれませんが、10年前に比べて、周りの木が生い茂って暗くなっていたり、木が枯れて明るくなっていたりと環境の変化が感じられたところもありましたので、野山の植物は、いつも同じようでも少しづつ変化しているようです。

この調査を通じて変化を明らかにし、只見の貴重な植物がいつまでも残っているように見守っていきたいと思います。最後になりましたが、調査にご参加いただいた皆さん、大変ありがとうございました。皆様のご参加をお待ちしております。

表4 季の郷湯ら里周辺の注意を要する外来種

区分		種名(2014年調査)	種名(2024年調査)	特に問題となる地域や環境
定着を予防する外来種		該当なし	該当なし	
総合的な対策が必要な外来種	緊急対策外来種	該当なし	該当なし	
	重点対策種	キシウブ	キシウブ	池沼や湿地
		セイタカアワダチソウ	セイタカアワダチソウ	湿原・湿地
	その他の総合対策種	ヒメジョオン	ヒメジョオン	山地や亜高山帯の草原
		アメリカセンダングサ	アメリカセンダングサ	湿地
		エゾノギシギシ	エゾノギシギシ	亜高山帯の草原や湿地
		ハルザキヤマガラシ	-	亜高山帯、河川敷
セイヨウタンポポ	セイヨウタンポポ	自然草原や高山		
		7種	6種	

環境省ホームページ:生態系被害防止外来種リスト、特定外来種リストより
<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>, <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list.html>

表5 2025年調査で新たに確認された種と今回は確認できなかった植物

2015年に確認されなかったが2025年に確認された植物	2015年に確認されたが2025年は確認されなかった植物
<p>アリアケスミレ、イワガラミ、ウゴツクバネウツギ、ウツギ、ウメガサソウ、ウラジロヨウラク、ウワミズザクラ、エゾタンポポ、エノコログサ、●オオアレチノギク、●オオイヌフグリ、オオチドメ、オオバノキ、オオバタネツケバナ、オオヤマフスマ、オオヨモギ、オニタビラコ、カナビキソウ、ガマ、カラスピシヤク、キランソウ、クサレダマ、クロウスゴ、クロモジ、ケアブラチャン、●コウリントンポポ、コチャルメルソウ、コナラ、コバギボウシ、コハコベ、コバノフユイチゴ、ザクロソウ、サルトリイバラ、サワオトギリ、サワグルミ、シヤク、シロネ、スイバ、センボンヤリ、ゼンマイ、タチツボスミレ、タニギキョウ、タネツケバナ、タムシバ、トチノキ、ナガハシスミレ、ナツハゼ、ノジスミレ、ハイイヌツゲ、ヒナスミレ、ヒメクグ、ホウチャクソウ、マキノスミレ、●マツヨイグサ、ミズタマソウ、ミゾホオズキ、ミツバツチグリ、ミヨウガ、ムラサキコマノツメ、ムラサキシキブ、●メドハギ、モミジイチゴ、ヤブヘビイチゴ、ヤマウルシ、ヤマエンゴサク、ヤマシロギク、ユウガギク、ヨシ、ラショウモンカズラ、リンドウ</p>	<p>アオイスミレ、アカバナ、アカミノイヌツゲ、アキカラマツ、アギスミレ、アキノエノコログサ、アキノノグシ、アブラガヤ、アリドオシラン、●アレチマツヨイグサ、イタヤカエデ、イヌゴマ、イヌツゲ、イワナシ、イワニガナ、オオウバユリ、オオカメノキ、オオチゴユリ、オニドコロ、オニノグシ、オヤマボクチ、カワラケツメイ、カントウヨメナ、●キキョウ(植栽)、キクバドコロ、ギシギシ、キソチドリ、キンポウゲ、クサボタン、ケキツネノボタン、ケナシヤブデマリ、コウゾリナ、コオニタビラコ、コオニユリ、サラシナショウマ、シラヤマギク、スベリヒユ、ダイコンソウ、タケニグサ、チドメグサ、ツメクサ、ツリバナ、ツルフジバカマ、トキワハゼ、ナギナタコウジュ、ナズナ、ナンブアザミ、ニガクサ、ハハコグサ、ヒメウスノキ、ヒメヘビイチゴ、●ヒメムカシヨモギ、ヒメヤシヤブシ、ヒメユズリハ、ブナ、ポタンヅル、マタタビ、ミズ、●ミチタネツケバナ、ミヤマカラマツ、ミヤマカンスゲ、ムラサキツユクサ、●ムラサキヤシオツツジ、メタカラコウ、モリアザミ、ヤナギタデ、ヤブガラシ、ヤブデマリ、ヤブレガサ、ヤマゲタ、ヤマニガナ、ヤマユリ</p>
70種(全229種の30.6%) うち外来種 6種	72種(全231種の31.2%) うち外来種 4種

●:外来種



8月の調査は、来年少生という男子を含め13人が参加

〈参考文献〉

会津只見の自然 只見町史資料集第4集【植物編】(只見町史編さん委員会, 2001)、学ぶ会通信vol.11, vol.20 (只見の自然に学ぶ会; 2017, 2024)、福島県只見町の花暦 (只見の自然に学ぶ会, 2021)、日本の野生植物1-5 (大橋広好ほか, 平凡社, 2015-2017)、ウィキペディア日本語版 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)、ふくしまレッドリスト 2024年版 (福島県自然保護課, <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16035b/redlist-kaiteikouhyou.html>, 2024)、いきものログ (https://ikilog.biodic.go.jp/rl_rdb/list/)、国土地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp>)

5月15日

小雨のなかスタート。調査が終わる頃は晴天でした。コソノコバイモ、カタクリなど56種類の花やつぼみを確認、うちスマレが7種もありました。

6月9日

用水路沿いの道でムラサキコマノツメを1株だけ発見。カタクリやコソノコバイモは実になっていて、タニウツギ、トチノキ、コマユミ、ホオノキなど樹木の花も咲いていました。比良林公園のドウダンツツジが見頃ですが、一部が枯れています。オキナグサも草刈りされていましたが、一部が残っていて実になっていました。オキナグサは草刈りには強いので生き残れるでしょう。



オキナグサ(5/15・高原豊)



ササバギラン 薄暗いスギ林のなか、一株だけ陽光を浴びて咲いてだっけ。



ヒメバギ 何回見ても、キテレツな花。ちっぽけな草だども、これでもマメ科。



タニギキョウ 遊歩道沿いに花ざかり。おなじところに、サワハコベの花も咲いている。キキョウの仲間だども、ちっちゃくて顔を近づけないと鑑賞できない。



オオヤマフスマ 花の直径は1cmくらい。素朴だども味わいある草。



ハクウンボク 「白い雲の木」とはいい名前をつけたもんだ。新緑まっさかり！木の葉に生気がみなぎってる！花ざかり。



ミズタビラコ サワハコベ、タニギキョウといっしょに咲いている。拡大すればきれいだが、なにぶんミニ。



山のアスパラガス、タチンオデ お浸しによし、油炒めによし。



サラサドウダン この巨樹は福島県の天然記念物に指定されている。樹齢800年といわれている。その根拠は、以仁王が、治承4年(1180)に宇治川の戦いで敗れ、尾瀬をとって越後国に落ち延びる際、ここでサラサドウダンの花のうつくしさを愛でられたという伝説にもとづく。

7月5日

7月の花暦は、会員の貝津好孝先生が参加されました。現在、日本冬虫夏草の会副会長、新種をいくつも発見されながら漢方薬の専門家。伊達市梁川の港屋漢方堂薬局の社長でもあります。この花暦調査のために、ご夫婦で早朝に出発されての参加です。



トチバニンジン 滋養強壯の薬草として有名。以前はどこさでもあったが、最近ではめっきり見かけなくなった。



ウメガサソウ ウメに似た花を傘のように咲かせる。これは草ではなく木。



クモにとりついた冬虫夏草 大きさは5mm以下。こだなが葉っぱの裏さ、貼っついてんだで。



オニノヤガラ 薬草で、土を掘り出すと芋のような塊茎がある。「これはメニエール病の薬」と貝津先生。

8月9日

天気はくもりで、歩くにはちょうど良く、ブナ林の中は気持ち良かった。花が少なくなってくる季節ですが、ツルリンドウやランの花が見つかりました。コバノフユイチゴの真っ赤な実が鮮烈でした。



あざやかに真っ赤になったコバノフユイチゴの実。葉っぱは冬でも青々している。食ってみると、ほんのりと甘みはあるが、うまいといえない。



小っちゃな葉っぱで、花は6mmくらい、茎も細くて、エンピツほどの丈の草。ほかの植物にまぎれて見失うくれえだ。こんな見たことのない草を見つとワクワクする。調べてみたら、ヒメナミキ。シソ科のタツナミソウの仲間。

ツルリンドウ 秋には、真っ赤な実をつける。

9月9日

お昼頃から雨という天気予報でしたが、雨は降らず、晴れのちくもり。むしろ暑くて大変でした。帰りに駅前のインフォメーションセンターで芍薬ソフトクリームをいただいて、生き返りました。



ジャコウコウの花が満開。ここは花付きがいい。麝香草というくらいだから、いいにおいがすっかと思いきや、ねっか期待はずれ。ハチが訪蜜していたども、蜜はうまそう。



タムラソウ この日いちばんのウキウキする花。独特な花に見えつとも、管状の花が集まりっぱなキク科の植物。でも、たった一株だけ。きれいな植物は掘り採られつから不運きわまりない。これが最後の株にならねえことを祈る。

ミズタマソウ 湿った暗い林下に自生する。花は終わっているども、毛だらけの実を逆光気味で撮影。こうしつと、花はなくとも水玉に見えつぺや。

10月4日



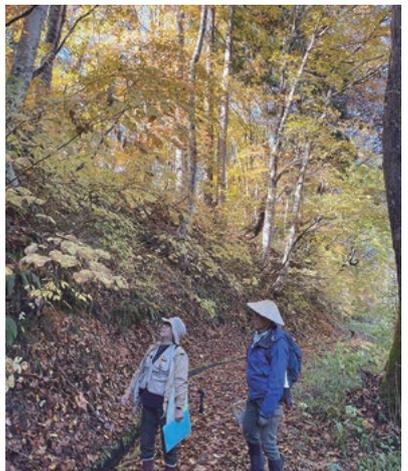
タムシバの果実 来月になったら、これが割れて、なかから白い糸を引いた真っ赤な種子が垂れさがる。ちなみに、タムシバはコブシの仲間で、ニオイコブシともいう。

モミジガサ 花のさかりはちつと過ぎたな。春の芽立ちは、シドキどつという。ほろ苦いが味わい深い山菜。

オオカメノキの花芽 「あつ！ バルタン星人！」と、ゆたじー隊長。オラは、森のなかで踊るバレリーナ…かな。ロマンチックにね。

11月4日

11月の湯ら里遊歩道は寒かつた。森のなかは日が差さないため、紅葉の発色はイマイチ。吐く息は白く、手先は冷たくなる。花はないし、実をつけた樹木も少々。しかし、どんな環境でも、楽しんで面白がるのがモットー。なにごとともセンス・オブ・ワンダーだべや。



コハウチワカエデの紅葉

水路沿いの歩道に行く隊長夫妻

全国ガンカモ類の生息調査

2025年1月13日 9:30 ~ 12:00

第56回全国ガンカモ類の生息調査、主催は環境省。この調査に参加して40年ほどになります。

今回は、常連6人からなる調査チーム。時折、日が差し込むことはありましたが、雪の降るなか、無事終えることができました。滝湖で見慣れないカモ1羽を発見。ミコアイサの雌。雄は白と黒のパンダ模様で人気がある。オラとしてははじめて確認。

カウント結果を報告します。

【滝湖】

コハクチョウ 6、ハクチョウsp. (種不明) 30、マガモ 5、カルガモ 3、コガモ 12、ホシハジロ 279、キンクロハジロ 228、ホオジロガモ 2、カワアイサ 9、ミコアイサ 1、オオバン 12
計11種 587羽

【只見湖】

マガモ 34、カルガモ 32、コガモ 141、オカヨシガモ 5、ヒドリガモ 4、ホシハジロ 159、キンクロハジロ 13、ホオジロガモ 4、カワアイサ 3、カンムリカイツブリ 2、カワウ 5、オオバン 69
計12種 471羽

総計14種 1058羽



ミコアイサ♀



滝湖で水鳥観察

滝湖・只見湖ともに降雪のため遠方の展望がきかないので、カウントできた個体数は少ない。只見湖は、オジロワシによってカモが攪乱されたため正確な数は掴みきれなかった。(新国勇)

この日のメインは、なんといってもオジロワシ!

只見湖でカモを数えていたら、数十羽のカモが上流から飛んできた。

「ワシでも出ましたかね?」と、菜緒子アネ。

「まさかね」と、オラ。

そしたら、もっとたくさんのカモが飛び立つ。上流に双眼鏡を向けると、湖の上を低空で飛行する大きな鳥影を発見。尾が白い。「オジロワシだ!」

湖畔の杉林に姿を消したので、ここからは持久戦。みんな探したあげく見つからないので、帰ろうとしたら、菜緒子アネがまた一言。「いた!」

なんと、杉林の中ほどに止まっていた。しかし、目を離すと、どこにいるのかももう分からない。まことに見つけにくい場所に止まっている。よくぞこの迷彩的な景色に溶け込むオジロワシを見つけたもんだ。「グッジョ!」(グッドジョブ)と、勝久あんにゃが称えた。

そういうわけで、やっとさ撮った写真がコレ。

この後、飛び立って只見町中心部の上空を旋回しはじめた。湖上のカモたちやオオバン、カワウは、一斉に飛び立ち、いなくなってしまった。オジロワシの威力、恐るべし。



学ぶ会新年会

2025年1月18日

18時から駅前の只見荘で学ぶ会の新年会を開きました。19名とたくさんの方に参加いただきました(うち女性10名)。一恵さんの司会で、代表あいさつ、乾杯ののち、にぎやかにみっちり3時間の宴となりました。(熊倉彰)



太田祥作さん講演会

2025年3月22日

表題の講演会を会員17名の参加で、民宿「ふる里」(新国代表宅)にて行いました。

濃密な内容に一同時間を忘れて聞き入りました。只見の隅々まで歩き回り見て回って得た菌界、動物界、植物界に

わたる5年間の成果を惜しむことなくお話しいただきました。新発見の数々、当会へのサジェスションなど感謝に堪えません。なお、この講演会をもとに学ぶ会通信に寄稿していただきましたので、17ページをご覧ください。(大宮明)

春の植物と野鳥観察会

2025年5月10日 参加10名

9時に蒲生岳駐車場に集合。昨晚からの雨は上がり、しっかりと濡れた新緑が鮮やかでした。見上げる蒲生岳は麓のブナの緑、山肌のカエデが様々な色を呈し、奥を見れば谷筋に白い残雪。やっぱり只見の春は最高。

まずは初参加の味村さんに自己紹介。双眼鏡の使い方を復習して出発です。さわやかトイレの入口にはツバメが巣をつくっていました。“土食って虫食ってシブーイ”という聞きなしのとおり、土を口で運んでつくった巣です。

カタクリ公園までの道のりではホオジロを望遠鏡で観察でき、よく見ると感激。蒲生岳駅舎では吉田留美さんが壁画を製作中でした。カタクリ公園の花を観察しながらサシバ、ヤブサメなどの声を聞きました。公園から水路沿いに麓を回り、雪崩の雪で塞がっていたのでUターンして戻りました。いくつかの鳥の声を聞くことができましたが残念ながら姿はほとんど見えませんでした。緑内障に白内障、中年にはなかなか厳しい現実です。(遠藤菜緒子)

〈確認種21種〉

カワウ、アオサギ、カルガモ、サシバ、キジバト、モズ、カケス、シジュウカラ、ホオジロ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、コゲラ、ヒヨドリ、ムクドリ、オオルリ、ハクセキレイ、チドリsp.、スズメ、カワラヒワ、ツバメ



水路沿いの歩道はまだ雪渓が多く残る



只見線会津蒲生駅舎の壁画の前に



只見で春の植物といえば、この花。カタバ(カタクリ)の群

生だべや。栗林の下は、一面ピンク色のじゅうたん。道路わき、水路沿い、山の斜面、どこもかしもカタバだらけ。



スマレサイシンは只見ではポピュラーな花。

地べたさ伏したジサガラ(アブラチャン)の木。これぞ、只見の木だ。重たえ雪の下敷きになって半年。べったり伏した木が立ち上がるのは、雪がみんな消えてから。これが多雪に争わず適応した成果。

(新国勇)



学ぶ会の総会と懇親会を開催

2025年6月28日 参加11名

午後6時から学ぶ会の総会を只見スキー場ロッジのレストランやまびこで開催しました。2024年度の報告と決算、2025年度計画と予算が了承されました。今年度の活動計画の目玉は、学ぶ会通信合本の発行です。

総会後の懇親会は飲み放題。あれこれ料理を注文しながら、にぎやかなひとときをすごしました。

午後9時にお開きしてからの帰り道、ホテルと星空の探勝会となりました。アマガエル、ツチガエル、フクロウ、ヨタカの鳴き声をききながら、ゲンジボタルの舞を鑑賞。

空を見上げれば、夏の大三角形、さそり座を堪能して解散。以上、フルコースの一夜でした。(新国勇)

今年の総会資料
毎年代表が作成しプリント
している。



暑気払いバーベキュー

2025年8月23日 16時～

奥会津ただみの森キャンプ場で暑気払いバーベキューを行いました。参加者25名(子供4名含)と多数ご参加いただきました。

この日も暑い一日で、暑気払いには最高の日暮れ。火起こしはお昼のグループの炭火がいい感じで残っており、順調でした。今年も美味しい生ビールを飲みながら、持ち寄りサラダバーを食べながらの楽しい準備時間となりました。乾杯と肉焼きが始まる頃にはほろ酔いに。焼肉奉行を男性数人が担当してくれ、絶品焼肉を心ゆくまで堪能しました。

この日の最後は目黒俊行さんの熱唱を皮切りに味村夫人がオペラの歌曲を披露して下さいました。『トゥランドット』より「誰も寝てはならぬ」という曲で、圧倒的な声量と



味村さんの歌に聴きほれました

美しい歌声に魅了されました。

参加された皆さま、多方面でのご協力ありがとうございました。参加できなかった皆さまは来年ぜひご参加ください。(向坂麻希)

ヒゲじいとオオハンゴンソウ

ヒゲじいこと大宮明さんは、只見町ブナセンター友の会の代表です。その大宮さんが、友の会会報No.22(令和7年8月26日発行)に、「第八次只見町振興計画について」と題して次のような提言をされていました。後半の部分です。

皆さんご存じのように町は2014年「ユネスコエコパーク」に登録され、10年の活動を踏まえ昨年は「ネイチャーポジティブ宣言」を発しました。また今年4月には日本自然保護協会から「ネイチャーポジティブ自治体」として認証されました。そうした町の今後の自然環境の保護・保全にとって大きな懸念材料のひとつが特定外来生物の存在です。中でも一番懸念されるのがキク科の植物「オオハンゴンソウ」です。

私は第一にこの駆除を提案しました。そのためには相当の人・物・金が必要です。しかしながら町財政には余裕がありません。人口減少により財政は逼迫しています。

そこで第二の提案は3地区とその中に27ある集落の普請・草刈りなどの際に或いは年間計画の中に入れてもらって作業できないかというものでした。幸いにも概ね賛同が得られ「目標指標」に「生息箇所を減らす」として入りました。この先本部会議や審議会を経て最後に議会の承認によって「計画」決定となります。

そこでお願いします。会員の皆さんには来年度から始まる(筈の)この駆除作業に町民の一人としてまた地区・集落の一員として声を掛け合って参加してほしい。どうかよろしくお願いいたします。かくいう私はどこにも属していない訳ですが、何らかの形で加わりたいと思っています。また町外・県外の会員の皆さんが関われる形が作

れないか良いアイデア・ご意見があれば是非事務局までお寄せください。ふるさと納税で用途を指定する方法も考えられます。

(只見町ブナセンター友の会会報No.22より抜粋)

ヒゲじい、よくぞ提案してくだされました。このような行動は、ユネスコエコパークに登録され、ネイチャー・ポジティブ宣言をした只見町だからこそやれることです。ふつうの自治体ではその意義さえわからないだろうし、やれないだろうと思います。

ただ、この写真を見てください。オライの前の田んぼです。畦にオオハンゴンソウが繁茂しています。草を刈るとき、大輪の花が咲いているので刈るのをためらったのでしょうか。その方は花を愛する人にちがいません。でも、この植物が強力な害草であることを知らないから残したわけです。さらに驚くのは、株を採ってきて庭に植えている人もいます。



ということから、大宮さんの提案で町振興計画に掲載されるのを機に、オオハンゴンソウ駆除の大キャンペーンをしましょう!

「オオハンゴンソウは放っておくと、オオハンゴンソウだらけになる」ということを広く知ってもらうよい機会です。それがきっかけとなって、町の自然を守ることに気づく町民が1人でも増えれば最高ですね。

「ヒゲじい、ガンパって!」

2025.9.3 イサム

集落めぐり③—塩ノ岐

2025年6月28日 参加15名

総会の行われた6月28日の午前中に3回目となる集落めぐりを塩ノ岐で行いました。参加されたのは、新しく入会された味村さんご夫妻のお子さん2人を含めて15名です。

塩ノ岐八乙女堂に9時に集合しました。車の回収のため2台を二荒山神社の駐車場に置き、一番奥の集落、問丸貝へ車で移動しました。計画は、問丸貝から八乙女まで、塩ノ岐川の流れに沿う3km強の道を歩きながら、あれこれ観察しようというものです。天気は晴れ、朝のうちはまだ過ごしやすいものの次第に暑くなりそうです。

問丸貝でただ1軒お住まいのお宅へ、集落内へ車を置かせてもらいたいとお願いすると、メンバーには数人の顔見知りが出て奥さんとしばしおしゃべりが始まります。塩ノ岐川対岸の斜面にはまだ大きな雪渓が残り、聞くと雪崩の跡だといいます。



スタート地点の間丸貝。手前の方はこの住人

最初は大山祇神社を見学。きれいに草刈りされた階段を登り2間四方ほどの質素な神社に。木製の引き戸を開けるときれいに整えられた室内に祭壇があります。写真左右の出っ張りはおそらく木鼻です。「ゾウ」と言ったら遠藤さんに「猿」と訂正されました。お寺には象がいても、神社は猿らしい。杉に囲まれた神社に1本だけ只見町には珍しく大きなイチヨウの木が立っています。



大山祇神社の祭壇

水路沿いの小道を空き家になっている裏をまわって糸沢橋を渡り、つぎの集落へ向かいます。田んぼ脇の川の流れ



集落巡り③—塩ノ岐マップ

国土地理院地図(<https://maps.gsi.go.jp/>)を利用

に沿う道から県道に出て、天沼へ。ここは趣のある古民家が数軒あります。よく見ると2階のベランダの支えが根曲りの木を使っているようです。となりの家にもありましたが、ほかでは見たことがない、なかなかしゃれた造りです。おそらく同じ大工さんの仕事でしょう。



天沼の古民家。特徴のあるベランダの支え

県道から小さな橋を渡り川に沿った農道を芦沢へ進みます。集落裏手へ小道を進むと四角い小さなお堂があります。戸を開けてみると若宮八幡神社とありました。

【イサムさんのメールからの引用】

芦沢集落にある若宮八幡神社。なかには長い髪の毛が下がっている。オラが子めらのころは、神社やお堂のなかに髪の毛がよく捧げられていたもんだ。これは願掛けをして願いが成就したお礼に自分のたいせつな髪の毛を切って奉納するもの。むかしはどこきでもあっけが、いまも残っているのはめずらしい。

次の集落は柳原。塩ノ岐公民館に並んで富士神社がある。実はここはあまり興味をひかれていなかったのだけれど、引き戸を開けてみたらびっくり。富士神社と不動明王の祭壇が並び天井には絵が描かれている。東北ではほかに見ない富士信仰の地だそうです。イサムさんから説明を聞き、一同「ふーん」と納得しました。



富士神社の祭壇。並んで右に不動明王の祭壇がある



富士神社の天井絵

ここで週末に帰省したと思われる若者グループから林道脇にシカ(カモシカ?)の死骸があると聞いて、イサムさんほか数名がずんずん林道の奥へ行き、そのまま塩ノ岐川対岸を県道に行く人と別れて進みます。

八乙女の集落に入りすぐに右に折れ^{ふたらさん}二荒山神社へ向かいます。ここで全員が揃いました。二荒山神社は鳥居の建て

替え工事中で、なかにその資材が入っていました。11時を過ぎかなり暑くなってきました。八乙女は見どころがたくさんですが、みなさんだいぶ暑さでお疲れのもようです。

妙雲寺と八乙女堂を重い足取りで見てまわります。御蔵^{おくら}入り三十三観音第二番札所八乙女観音堂の内部をはじめて見ました。



最後に訪れた八乙女観音堂と内部のようす

ちょうどお昼になりました。ここから車の回収に間丸貝へ向かい、今日の集落めぐりはおわりです。10名ほどは小林の五十夢で昼食をとり、解散となりました。

塩ノ岐もまた、かなり過疎・高齢化が進んでいると思われますが、各集落とも草刈り等きれいにされていました。しかし我が集落・黒沢を鑑みても、それぞれの集落が小さく、維持していくことには大きな苦勞があるだろうと思われました。(熊倉彰)

富士神社と富士信仰

柳原集落にある富士神社。内部は富士神社の祭壇と不動様の祭壇が並んでいる。はじめは富士神社だけ祀っていたが、対岸にあった不動堂が大水による土砂崩れで壊れたため移したという。ちなみに、みごとな格子天井の絵も不動堂からもってきたものという。

この神社は、なんと富士山をもっている。雑木でおおわれているが、岩で盛り上げられた富士山が裏にある。これはかつて富士信仰があった証。富士山を真似た小山をつくり、それを登れば富士参拝を果たしたこととする山岳信仰。関東各地には多くあるが、東北地方では確認されていないらしい。とすれば、これは富士信仰の北限地!? もしかしたら東北で唯一かもしれない。

塩ノ岐の人たちは、これを富士山とよび、子どものころは登るのを禁止されていたという。また、女性も登れ



富士神社の富士山をバックに記念写真
ホオノキやアカイタヤが茂り、雑草も繁茂しているが、刈り払えば、富士山の山容がでてくると思う。

なかったという。しかし、富士信仰は廃れてしまい、その意味を知る人はいない。そこで、これはなんとしても町の史跡に指定して広く知ってもらい保存しなければならないと考えている。(新国勇)

集落めぐり④—福井

2025年11月9日 参加6名

4回目となる集落めぐりは福井です。朝日公民館に6人が集合しました。雨が心配されるもののそれほど寒くはない日和です。あらかじめ御霊神社前に車を回してきました。

公民館横から伊南川の土手に出ます。大畑沢がおおよそ黒谷と福井の境をなしていますが、^{ぼっけざか}化坂と呼ばれる坂の下手、清水田表は福井になります。土手道はたくさんのクマの糞が転がっていて、ほかに食うものがないのか、どれも空き地に積んである粃殻を食べたと思われる糞です。

国道に出た角に地蔵堂があります。がらんとした板張りの奥に奉納と書かれた数枚の垂れ布（御戸帳と言うらしい）の奥に高さ30cmばかりの小さな地蔵様が置かれています。堂の正面の戸はいつも開け放たれているのにきれいに保たれているのは、近くの方がまめに掃除をしているからでしょう。



戸帳をめくって現れた小さな地蔵様

国道を少し進むと真新しい六地藏があります。建て替えられた堂の中に石碑とともに並んでいます。戻って集落の中に入ります。このあたりは古い道形が残っていて、込み入った迷いやすい道です。少し迷って山際の若宮八幡神社に着きました。神社正面の彫刻と境内にストーンサークル



集落巡り④—福井マップ

国土地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) を利用

のように置かれた石祠が印象的です。



若宮八幡神社と境内の石碑

この先は集落から離れ、山際ののどかな農道を進みます。農道から少し分け入ると溜池が現れます。着くなり数百のカモが群れをなし飛び立ちました。勇さん、遠藤さんによるとマガモ、カルガモ、コガモ、オシドリがいるようです。池は100m四方といったところですが、水面の半分ほどはジュンサイに覆われています。人工池ながら周囲の林と渾然一体となり自然度が高く感じられます。



カモ類の住処になっている溜池

農道からゆるやかに登る参道に入るともう顔も判然としない六地藏があり、その先に興厳寺があります。勇さんが「雪国仕様」と言う通り、立方体の飾りのない建物です。すでに冬支度を終え、正面も板で覆われています。隣接する墓地の古い墓石に可愛らしい石仏が彫られています。



苔むして顔も判然としない興巖寺参道の六地藏



興巖寺の墓地で見つけた石仏

車を置いておいた御霊神社前にきました。しめ縄のかかった鳥居と質素な本殿が見えます。小広い境内にはスギ、トチノキ、ケヤキの大きな木が並んでいます。「昔はもっとたくさんの大木があった」とは勇さんの弁。



御霊神社境内の御神木

ここからは車に乗り大和久へ。家々の裏にある稲荷神社は集落共同のものといえます。見かけた大和久の方に聞いて

た話です。そして大山祇神社の場所も伺いました。国道に出て楢戸との境、川側に小さな社がありました。最近土台を新しくしたそうです。



下福井の端村、大和久にある稲荷神社

これでだいたい今日の集落めぐりは終わりです。なんとか降られずにすみしました。途中、国道脇の二十三夜塔を見て朝日公民館に戻りました。

あらかじめ新編会津風土記を見てきましたが、村のかたちはほぼ変わっていないようです。勇さんが三島神社のありかを気にしていましたが、風土記を読み返してみると「相殿一座」(主祭神に加えて他の神を合祀すること)とあるので、若宮八幡神社に合祀されているようです。

只見としては広々とした農地と空を眺め、山際の農道を歩いてきました。かつて荒井村が上荒井村、下荒井村(現上福井、下福井)二村に分かれたのは、広い耕地を持ち豊かな村だったせいだろうと思ひ至りました。(熊倉彰)



御霊神社付近から見る福井の風景

町の文化財 過疎集落の文化財レスキュー 梁取虚空蔵菩薩像 2025.5.21



梁取集落の急峻な山の中腹、巖窟がんくつのなかのお堂に2体の虚空像菩薩こくうざうぼさつが安置されています。一木から彫られた坐像ざざうと寄木造りゆうぞうの立像です。坐像は室町時代、500年ほど前のもの。立像は鎌倉時代、700年前の作。どちらも只見町重要文化財に指定されています。毎年5月16日は虚空像さまの日で、村休みでした。近郷近在から参拝者が訪れて、にぎやかだったということです。しかし、多様化する社会と過疎の波で、近年は放置されたまま。虚空像堂は風雨と雪にさらされ、キツツキには穴を開けられ、コウモリやカマドウマの巣

となり、崩壊寸前の状態でした。集落に責任者はおらず、保存する組織もありません。信仰心があれば、だれかが面倒をみるのでしょうか、もう限界です。そこで町教育委員会がレスキューに乗り出しました。オラは文化財調査委員の立場から参加しました。2体それぞれを和紙で何重にもくるみ、大事にかかえて山を降りました。*ただみ・モノとくらしのミュージアムでは、応急的修復と調査をへて『梁取 虚空蔵菩薩像お披露目展示』を開催中です(3/1まで)
(新国勇)



信仰心が厚い上福井の人々

上福井集落の国道わきにある地蔵堂。戸はなく、いつも開いている。奥に地蔵様ご本尊が安置されている。それは御戸帳に幾重にもくるまれていた。令和5年に奉納されたあながいちばん新しい。地蔵様祭りの旧6月26日には、その年に生まれたわが子の名前を記して奉納し、すこやかな成長を祈る。ここで感心したのは、地蔵堂の中がほんとにきれい。ほこりにまみれ、クサムシが散乱しているのがふつうだが、ここはそうじが行き届いている。地蔵様への深い信仰心が現代も脈々と受け継がれているのを感じた。



下福井の菩提寺、勝倉山興厳寺

クマ(熊倉彰)さんのいうとおりマッチ箱のようなお寺。簡便なお寺ながら、応永8年(1401) 建立といわれる古寺。中には釈迦如来をはじめとする数々の仏像、釈迦涅槃図などりっぱなご宝物がある。毎年3月、この寺に、鼻くそ団子という小さな団子をこしらえて奉納する。



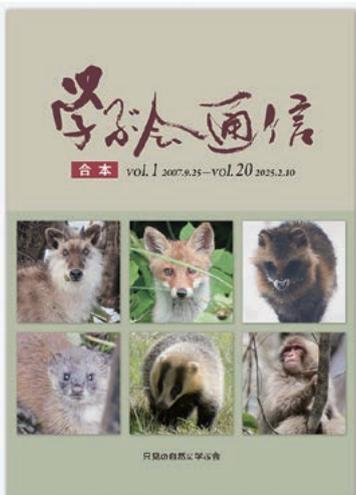
ホオノキの巨樹

興厳寺に通じる参道の入り口にホオノキの巨樹がある。樹高はさほど高くなく、変則的な樹形。根本付近が徳利状にふくれている、幹まわりは4m近い。ホオノキとしては、めったにない。



国道脇の石祠群

下福井集落の国道289号わきにある石祠群。二十三夜塔(1796年)はりっぱ、それに巳待塔(1814年)と不詳な石塔が各1塔。20年くれえまえに、石祠の横さ、枝ぶりのいい松の老木が1本そびえていた。それは遠くから見ると、一服の浮世絵のようだった。道を通る人々の目印であり、休み場でもあった。厳冬期、機械除雪がないころは、吹雪で方向がわからなくなると、この松を目指して雪のなかを歩いたと古老から聞いたことがある。残念ながら、枝折れの危険があるということで伐られてしまった。年輪を数えたら250年だった。もったいないことをした、といまでも思う。(新国勇)



『学ぶ会通信合本』完成しました

学ぶ会通信 合本 vol.1 2007.9.25—vol.20 2025.2.10

2025年10月31日発行 A4判冊子、本文258頁、オールカラー、160部印刷

今年度事業として予算化していた『学ぶ会通信合本』が完成しました。2007年から足かけ18年かけて20号に到達した学ぶ会通信をまとめたものです。

巻末に2001年から2025年にわたる「主な活動」と「発行情一覧」、「只見の自然に学ぼう会」の告知用ポスターとチラシの一覧を加えました。どこから読んでも情報のぎっしりつまった1冊です。

町外へは11月11日に発送、町内は郵送料の節約のため会員数人で手分けしてお届けしました。残部が少々ありますので、追加で欲しい方は1500円で購入可能です。

只見町のトンボと鳥類

太田祥作

「この町は自然豊か」と言うのは簡単だが、具体的にどう豊かなのか。私は2020年から2024年まで5年ほど居住したに過ぎず、語るに不勉強とは思いますが、浅学ながらこの町の自然について、専門的に調べてきたトンボと鳥類を中心に書いてみたい。

■ トンボ

只見町のトンボ目は2025年時点で70種が確認されている。これは県内の自治体としては多い方だ。概して奥山地域というのは、急峻な地形により水辺環境に乏しく、トンボ相も単調化しやすいのだが、只見町は多雪地帯であるため湿地が生じやすく、さらに沼ノ平の天然性湖沼や、人が開墾した水田や溜池といった二次的水辺環境がある。こうした多様な水辺環境を背景に、奥山としては驚くほど多くのトンボが生息するようになったと考えられる。すなわち、昔から行われてきた稲作がトンボの増加に寄与した点は大きいと言える。

この町を代表する種にアマゴイルリトンボがある。日本

固有の本種は、本州東北部の僅か5県、それも多雪地帯を中心に分布する「雪国のトンボ」であり、世界的にも珍しい。そのアマゴイルリトンボだが、只見町においては全町域に多産しており、確認地点数は筆者の調べた限り80余地点に達した。この個体密度は恐らく全国有数の規模で、「日本で最もアマゴイルリトンボが多い町」と言って差し支えないと思われる。只見町の多雪環境と適度な標高域、卓越した森林と遍在する水辺環境がアマゴイルリトンボの生息条件と巧く合致しているのだろう。

なお、トンボ目全体としてはやはり寒冷地性の種が多く、ルリイトトンボを筆頭に北国のトンボが多くを占める。ルリイトトンボは福島県内でも3町村にのみ知られ、町内では1ヶ所の沼に生息する。繁殖最盛期にはまるで沼を瑠璃色に染めるかのように、夥しい数のオスが水面を低く飛び交う。また、町内の里地では春、休耕田からオゼイトトンボやヨツボシトンボが多数発生し、梅雨時になれば、鉛色の空をアキアカネ(冷涼な山地で越夏する習性がある)の大群が埋めつくし、晩夏、溜池をオオルリボシヤンマが占拠



する。こうした光景が身近にあるのも寒冷地ならではだ。また、多雪による湿地の遍在は、ハッチョウトンボの全町域的な分布にも繋がっている。只見スキー場の滑走斜面には水が染み出す小さな湿地があり、ハッチョウトンボはそんな風変わりな場所でも発生している。

一方で、温暖化に伴い北上している暖地性の種も次々と見つっている。只見町から東北初記録となったホソミイトトンボは、2022年以降完全に定着したほか、マルタンヤンマやネキトンボも定着した可能性が高い。2024年には新たにカトリヤンマも確認された。

只見町が奥山地域にあることを反映してか、コシボソヤンマやウチワヤンマ、コフキトンボといった平地に分布の中心をもつ種は稀である。また、流水性の種は全体として多様性に乏しい。ニホンカワトンボやクロサナエといった河川源流域～上流域を好む種ばかりが優占するなかで、例外的にムカシトンボやモイワサナエは少なく、こうした種の生息条件には未解明な部分が多い。そのほか、東北地方では珍しいヒメサナエやコノシメトンボ、ヒメアカネが只見町に産する点も注目される。

このように、只見町のトンボは様々な要素を併せ持つ複雑な種構成となっており、興味が尽きない。

鳥類

只見町の鳥類相はまず、山地森林性の種の多さによって

特徴付けられ、ブナ林ではコノハズクやコルリ、クロジが繁殖するほか、アカショウビンも多く、その独特なさえずりが家に居ながらにして聞かれる。オオアカゲラも山地に普通だが、その古巣を利用するブッポウソウは局所分布し、個体数も少ない。水辺では、ヤマセミが伊南川・只見川流域に広く分布し通年見られるほか、オシドリが高密度に生息しており、春から秋まで町内のあらゆる水域に見られる。また、全町域に生息する大型猛禽類・クマタカは人の生活圏内でもよく見られ、人家の鶏小屋を襲ったり、狩りに失敗したのか窓ガラスを突き破って屋内に侵入した事例もあり、これも山と集落が接する奥山地域ならではのと言える。

世界でも日本だけで繁殖し、多雪地帯に分布の中心をもつノジコは「雪国の夏鳥」と呼ぶに相応しい小鳥である。只見町には比較的多く、河川や谷戸など水辺と隣り合った林に生息・繁殖している。

年平均気温が低いいためか、寒冷地性の種も見られる。夏鳥ではニューナイスズメが繁殖しており、集落周辺で容易に観察されるほか、厳冬期には冬鳥のハギマシコが定期飛来する。

二次的環境を利用する種としてはサシバが非常に多く、水田は狩り場、付近のスギ林は営巣地として利用されている。これにはサシバの餌となる両生類の多さも関わっているかもしれない。只見湖・滝湖は人造のダム湖だが、比較的浅く、水草が繁茂するなど餌条件が良いためか、オオハ



クチョウほかカモ類の越冬地として利用されている。町内で最も絶滅が危ぶまれる夏鳥・チゴモズは、集落近くの桐畑などで記録されているが、個体数は極めて少なく、繁殖状況も不明である。

■ 生物による生態系被害の少なさ

只見町における野生生物の生息状況は、種多様性や個体数の観点からみて、国内でも屈指の健全性を有していると思われる(ただしダム開発の負の影響はあっただろう)。その背景には、国内各地で課題となっているシカ害や外来種問題が、只見町では顕在化していない点が挙げられる。

まずニホンジカは、植物の殆どを食い荒らすため、在来哺乳類の中でも生態系に与えるインパクトが大きく、増えすぎた場合には植生崩壊や生物多様性の低下、さらには土壌流出による土砂災害を誘発するほどの「害獣」となる。逆にシカが少なければ健全な植生が残りやすく、シカが生息していない佐渡島の植生の豊かさはその好例である。シカの個体数を抑制する一因に多雪があり、冬季のエサ不足で生存率が低下するほか、急斜面を苦手とするシカには雪崩による急傾斜地の分布も移動障害として作用する。さらに、スギ林は冬季のシカのねぐらとして利用されるが、只見町における人工林面積の少なさもシカの越冬を難しくしている可能性がある。こうした諸条件がシカを低密度に抑

え、健全な植生が残されたのかもしれない。ただし、温暖化で積雪量が減少した場合、シカは増加に転じる懸念がある。

次に外来種だが、様々な水生生物を捕食し水質悪化まで起こすアメリカザリガニを筆頭に、淡水域における外来種被害が日本全国で深刻化している。しかし、只見町は奇跡的にアメリカザリガニやウシガエルが定着しておらず、水辺の生物における健全性は極めて高い。こうした地域は今や全国的にも希で、その価値はもっと町民に知られてよいだろう。そして、今後も外来種の侵入防止を徹底する必要がある。

■ 河原環境について

只見町の自然というとブナ林はよく知られているが、河原環境も高く評価されるべきである。町内の河原には希少なユビソヤナギのみならず、ヒゲナガヒナバタやカワラバタ、アイヌハンミョウ、アイヌテントウ、ニッポンハナダカバチなど、攪乱依存の希少な昆虫が数多く生息している。しかし近年、町内各地で河川改修工事が急速に進み、同時に河原環境は悪化の一途を辿っている。こうした状況下で、河原環境の学術的な生物相調査や保全対策は喫緊の課題であろう。

(2025.12.20 秋田市の自宅にて)

只見町から福島県初記録の迷鳥・ヤマショウビンが見つかった

仕事で只見町鳥類リストを執筆する際に、聞き取り調査を進める過程で明らかになった重要なデータです。残念ながらそのリストへの掲載は叶わず、もったいなく思っていたのですが、「学ぶ会」のご厚意により幸いにも本誌をお借りして掲載いただける運びとなりました。感謝に堪えません、心より御礼申し上げます。 太田祥作

これまでに町内で記録された鳥類のうち、最も稀な種の一つと言えるだろう。

人家の台所の窓ガラスに衝突、失神していた個体が家人に拾われ、その際の写真が残っている。この個体は間もなく回復し、自力で飛び去ったという(新国勇, 私信)。

〈引用:福島県日本野鳥の会連携団体連合会(2016)福島県鳥類総目録, 22pp., 福島県日本野鳥の会連携団体連合会, 福島〉

ブッポウソウ目 CORACIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

ヤマショウビン *Halcyon pileata* (Boddaert, 1783)

〈データ〉

1個体, 1996.5.28, 只見上町, 鈴木幸子 衰弱個体を拾得。

迷鳥。福島県内では2007年に郡山市逢瀬町で確認されているが(福島県日本野鳥の会連携団体連合会, 2016)、本記録はこれに先んじており、県内一例目だったと思われる。



ヤマショウビン 1996.5.28 只見上町 鈴木幸子撮影

おおた しょうさく:1995年愛知生まれ。長野育ち。神奈川・東京で学生時代と最初の就職を経て、2020年から2024年までの5年間を福島県只見町で過ごす。町の会計年度任用職員として勤務する傍ら、トンボと鳥をメインに野生生物を調査。2025年より秋田へ移り、県内全域の調査や保全活動を実施中。研究が遅れがちな地方の生物相調査をライフワークとしている。日本トンボ学会会員。

会員からの只見自然情報 2025

学ぶ会メーリングリスト(2025年1月～12月)より

1.21 ニホンジカのフィールドサイン

雪原さ、でかい足跡が長々と続いている。30-50cmくれえ深くぬかっている。途中、シロヤナギの芽を食った跡がある。下歯で枝の半分を切り、引きちぎった跡だべな。独特な食跡。

これは、ニホンジカだと思う。ニホンジカやイノシシは、雪国では生活できねえなんて言わちえだども、そだごとはねえな。どっこいしぶとく生き抜いている。ちなみに、ここは国道のわきで、人家にも近い場所。 イサム



1.23 ニホンザルの群れ

厳冬の予報だったが、春先みでえな陽気が続く。いつものパトロールしっちら、サル軍団に遭遇。20匹前後の群れ。意外に子ザルが多い。

断崖絶壁の真下を、サルたちがラッセルしている。ときどき崖上から小規模のなだれが襲う。しかし、お構いなし。「そんなの怖くて雪の中で暮らせっか」という雰囲気。

なかよくグルーミングする2匹。あたりでは子ザルがにぎやかにさわぐ。序列はあんだべが、それぞれ2匹の仲間、カップル、親子同士でたたずむ。



移動しながら、思い思いに食事をしてきた。木の枝の皮を食ったり、キノコを食っている。カワラタケのようなキノコばかりで、栄養はなさそうだが、腹

が満たされればよいくらいだろう。

イサム



1.24 ヤマドリに接近!

日本の国鳥はキジ。だども、オラはヤマドリの方が国鳥にふさわしいと思う。キジは日本以外にもいるが、ヤマドリは日本にだけ生息する固有種。なんといっても、羽の模様とそのグラデーションが秀逸。国鳥にはできねえども、まっと見直してほしい鳥だべな。

この写真は、ある沢にじっとしていたあなを撮ったもの。雑木が邪魔になって見つけにくいのを逆手にとり、オラが雑木に隠れて近づいて撮影した。ヤマドリさんには気づかれなかったようで、ゆうゆうと沢に降りて食事していた。 イサム



1.25 土左衛門ジカ

家の前
けさ、ゆんめつての水路さ、でっけえ獣が引っかかっているちゅう連絡が入った。水路さはまってる獣の足にロープをまいて引き上げべとしたが、流れが強いところに重たすぎて上げらんへえ。そんじえ、いったん下流さ流して、コンクリート柵中さ流れ着いたのを3人ががりて引き上げた。

獣の正体は、体長1.3mのニホンジカのオス。たぶん2歳ぐれえ。雪原を歩いていて、間違つて水路さドボンして、はいあがらんへえで流つちえきたんだべな。

これまで、この水路には、イノシシ、ハクビシン、タヌキ、テン、ノウサギが流れてきたことがあんども、今回がいちばんでっけえな。 イサム



2.20 吹雪になるとやって来る

雪が酷くなるとやって来る鳥達。うちの猫の遊び相手(?)になってくれます。ご褒美はヒマワリの種です。逆光なので色がはっきりしませんが、ヤマガラさん。 みゆき



2.23 降れども降れども止まず降る

きょうの天気は、くもあれえだ。「くもあれえ」ちゅうは、雪が降っているかと思えば、急に晴れり、曇ったり、はたまた吹雪いたりとしょちゅう天気が変わることをいう。

積雪は、現在325cmと全国第5位。しかし、6時間、12時間、72時間での積雪量は全国第1位。きんの夕方雪掘りして、今朝方には60cm積もっている。さすが全国トップだけのことはある。只見のアメダス観測地は、河川敷にちかい吹きさらしの場所だ。まっと雪の深い蒲生集落か入叶津集落さおけば、たちまちいちばんさならぶべな。おらいの家も、雪が2階の屋根さ届きそうだ。車庫や蔵の屋根は、とっくに雪とくつついちゃまっている。 イサム

2.23 今日のお客さん

いやーよく降りますね。今日は統計史上第2位の325cmの積雪深を記録しました。2013年の最高記録341cmを更新するのでしょうか? さて、今朝玄関前のスペースにいつもとは違

う鳥が入り込みました。いつもはシジュウカラやヤマガラです。今日は冬鳥のジョウビタキ♂でした。なかなか出ていきませんでした。 明



4.8 ジョウビタキがなついでる

毎日カップルのジョウビタキが庭で遊んでいます。黒谷入のフクジュソウが咲き始めました。例年よりかなり遅いかな? 和子



4.25 ネイチャーポジティブ自治体に

只見町が、日本自然保護協会から「ネイチャーポジティブ自治体」として認証されたという。まことにけっこうなことで歓迎します。自然環境を保全し回復させるネイチャーポジティブ宣言をした只見町。生物多様性の重要地域であり、それが持続的で実効性のあることを評価し支援する日本自然保護協会。これで自然環境を守り抜くことを自他ともに認めたこととなります。ダム湖の堆積土砂問題、八十里越道路を横断する両生類保護とイヌワシ保護の問題、伊南川のユビソヤナギ保全などなど課題はいっぱいありますが、ネイチャーポジティブを宣言し、自然保護協会から認証までもらっているが、なにもしないでは済みませんよね。わたしたちも、しっかり見守っていきましょう。 イサム

4.29 モウセンゴケのあかちゃん

モウセンゴケの嫩葉^{どんよう}。直径は2mmくらい。そばに、あかちゃんのにぎりこぶしみたいな開葉前の葉が見える。先っちょの粘液が光って、王冠のようだべ。

こだ小っちゃくても虫は捕めんだべな。 イサム



5.27 夜の訪問者

夜、オライの玄関先さやってきた訪問者、アカハライモリ。いまや、全国で絶滅しそうといわちえっとも、只見ではふつうだな。産卵場をさがして移動中だったべな。 イサム



5.31 湯ら里散策

横浜から南会津と只見にお邪魔しました。湯ら里でお風呂をいただきましたが、その際に散歩して見かけたものをシェアいたします。

①背中線のあるツチガエル
調べてみたら、ツチガエルで背中に線があるものはなかなかレアだとか。只見ではよく見かけられますか? なぜ線が発生するのは未詳のようです。



②白花のスマレ
いわゆるマンジュリカの白花かと思うのですが、只見でシロスマレの記録はないですよ? 松井



①こんなツチガエル見たことがないです。
②私にはアリアケスマレにも見えます。 明

6.3 オオミズアオ

オオミズアオが出没、今の時期だけ? 和子



たしかにオオミズアオにしてははやい。もっと暑い初夏からが発生時期です。なんでだ? イサム
5月28日の夜にはわが家にもこられました。いつもは真夏の夜です。「早いね」と言っていたのですけど。 みゆき

6.5 メタルチックなゾウムシ

ブドウの葉っぱにいたメタル仕様のゾウムシ。体長5mmほどだども、たいへんうつくしい。葉枝を折って、葉っぱを丸めていた。葉巻のように細長く巻いて垂れ下がっている。ドロハマキチョッキリ (だと思う)。ぐるぐると歩きまわり、なかなかの働き虫。



大発生したらおおごとだども、1匹ぐれえなら構わなえでおくべ。 イサム

6.7 オドリコソウとハナウド

先週、只見に行った際、道端にオドリコソウとハナウドがたくさん咲いていました。オドリコソウ、いわきではなかなか見つからず、久しぶりに花が見れました。ハナウドも群生している場所はいわきでは知りませんね (あるのかしら?)。春先に河川敷にまばらに咲いてますが、草刈りですぐに姿を消してしまいます。本当に只見は自然が豊かだなあ…と感じます。

*ハナウドは、只見だとオオハナウドだと大宮さんに教えてもらいました。

大友



6.20 只見川の川霧

夏の只見川といえば川霧。JR只見線の名勝としても有名。「週間朝日」のグラビア特集になったときもあった。写真は19時5分、只見町塩沢の川霧。真ん中にそびえるのは蒲生岳。川霧は、ゆっくりと移動する。川上から川下へと流れるが、風向きによっては上流に押し返されることもある。いつとき霧幻峡の世界がひろがる。

イサム



6.25 オニドンボ!

只見小学校にある池。そのそばで、オニドンボの羽化に出くわした。オラが小っちゃころは、朝早く起きて、側溝さ生えでる草さつかまって羽化したのを捕まえてきたもんだ。むかしは、早朝、田んぼの水見や牛馬の草を刈るとき、水場ちかくで、こだ光景をよく目にすることができた。しかし、いまでは3面コンクリートの側溝になっちゃってドンボの羽化なんてなかなか見らんじゃなくなった。只見小学校の池は、むかしの水辺を思い出させんな。

イサム



6.27 ショウキラン

「これって何ちゅう花?」どって、小川のさよ子アネからメールで写真がとどいた。

なーんとショウキランでねーの! 鮮度もいい! さっそく案内してもらい現地さ到着。すると、すぐわかった。杉林に囲まれた薄暗い谷間のひと隅が薄桃色を放ってる。まるでショウキランがオーラを発しているようだ。

イサム



6.29 肋骨雲

13時10分、深沢温泉むら湯の上空にて、見慣れぬ雲が浮いていた。背骨からあばら骨が出ているような不思議なカタチ。調べたら、「肋骨雲」らしい。もっとも高い雲である「巻雲」の一種。ハケではいたような繊維状の雲で、伊南川に沿って東西に長くのびていた。出会えて、なぜか儲けたようなうれしい気分。

イサム



7.25 ヤマユリも暑そうです

今年も咲いてくれました。今日で48個ほどの花。



ただし、サルが蕾を食べてしまい20本

ほどのユリがダメになりました。今年は近くの桑の実が不作で、その代わりなのかまだ咲きそうもない頃にサル達は食べて行ったようです。しかも、道沿いのユリだけ(やはり賢い!)。暑いので花も元気がありません。それでも、良い薫りが漂っています。

みゆき

7.29 どういうこと?

アブ(?) がセミを……。セミを襲っているこれは何者?

恵子

シオヤアブの仲間ようです。オオズメバチやオニヤンマも捕らえて食べるそうです。

明



8.2 魅惑的だな、食虫植物は

藻のようなものが水面に浮いている。そこからあざやかな黄色い花が咲いていた。よく見ると、あちらこちらに、ひょっこり顔をだしている。イヌタヌキモの花だ。絶滅危惧種の食虫植物。総状の葉っぱに捕虫囊という楕円形の袋がたくさんついている。この袋で、虫をパクッと吸い込むという。うすいピンク色の袋は、まだ虫が入っていない空の状態。黒い袋は捕えた虫を消化している最中。虫といっても、ミジンコやボウフラのような動物プランクトン。それらを栄養にして水面に浮きながら生活する。こんな植物が身近にあることだけで満足。

イサム



8.5 やって来ました

オオミズアオがごく間近で撮れました。オオミズアオは春(4~5月)と夏(7~8月)の年2回発生するそうです。これは夏型のオオミズアオでしょう。幼虫を見たい。

明



9.21 お久しぶりー大きくなったね

子連れの子ヤマドリ、5羽もいました。時々、H家の庭に現れていましたが、今朝は我が家に姿を見せた母鳥と子ども（それも4羽も引き連れて）。前に見たときはちっちゃかったけど、まあ立派になりました。ほぼ同じサイズです。疑問！ヤマドリの巣立ちってどんな風なのかしら？よくあるように飛び立つの？あまり飛べそうにないけど。

みゆき



ヤマドリは巣なんかつくらねぞや。くぼんだところさ産んで抱卵して、かえったヒナはすぐさま歩き回っおや。おんなじところさいたら、ヘビやらキツネやらテンやらに見つけらっちえ、食われてしまう。んだから、親鳥はヒナがぜんぶ孵化しと、さっさと立ち去っちもうんだて。 イサム

9.27 只見初記録！

「この花、なんちゅうの？」と小川のさよ子姉からの質問。「……？」しばらくして、「カラスノゴマ？……かもしんにえ」と思い、さっそく咲いているというさよ子姉の畑へ。まちがいなく、カラスノゴマ！それも只見初記録！



道ばたや畑の雑草なんだも只見では見たことがねえ。オラは若えころ、東京で見たことがある。図鑑には、東南北部以西に分布と書いてあつから只見にあつてもおかしくはねえ。しかし、なんでさよ子姉の畑さある？この前は、ショウキランを発見したさよ子姉。ひよっとしつと、珍草探索発見人かもしんにえ。こんだからは、花暦調査さ、無理してでもひっぱり出すべえ。イサム

10.16 居間から仔グマが撮れた

さきほど、なにげに居間から外を眺めたら家の裏手のクリ林に仔グマがいました。窓を開ける音に気づいたのか、土手下のヤブに入っていました。撮れたのは後ろ姿。今年生まれでしょうか、脚の裏がかわいいかも。でも気がつかなかっただけで、この少し前に母グマがここを通ったのかな。 クマ



10.19 マミの天国

田んぼのあぜを、太ったネコくらいの動物が歩いていた。「マミだ！」車を止めて、道路わきから撮影開始。マミちゅうは、アナグマのごんだ。マミは、顔をあげることなく地面に顔をくっつけながらなにかをむさぼり食って歩いている。だんだんオラのほうに向かってやってくる。そしてオラの靴にふれたら、さすがに気づいたらしくきびすを返して一目散に逃げた、と思ったらすぐ顔を地面にうめて食べ物探しをはじめた。警戒心、まるでなし！



マミは目がわるいという。しかし、あまりにも無防備。真っ昼間に田んぼのあぜさ姿を見せれたりすれば、キツネやイヌワシ、クマタカのかっこうの餌

食となる。しかし、ここではおおきな工事があちこちでさかんにおこなわれていた。トラックがひんぱんに行き交い、工事現場には人がいる。これでは天敵が近寄れないわけだ。マミちゃん人間活動を利用して安心してくらしているなと思った次第。 イサム

10.20 アトリが見ごろ

冬鳥のアトリがやってきた。数万羽の大群になるときもあるが、今年は数十羽単位の群れ。電線さびつしりと止まり、ときおり田んぼさ降りて稲刈り後の落穂を食ってる。ひとしきり食うと、また群れで電線さ止まる。これを何度も繰り返す。ただいま、見ごろ。イサム



10.22 怪談「マムシグサ」

ある日突然、マムシグサの実が変身。調べてみたら犯人はヒヨドリのようにです。それにしても毒は大丈夫なのか？確かにヒヨドリはヤマウルシの実も食べているけど。 みゆき



10.22 ビンズイだらけ！

「ツイーツ」とあちこちで鳴きかわす鳥がいる。今年もまたやってきた。ピンズイだ。



本来は高い山や高原で見られる鳥。さえずりは、とてもきれい。それが越冬

のため南にわたる途中、只見を通過する。只見はビンズイの通過地兼滞在地となっている。10月はそのピーク。今年はとくに多い。どこさにもいる！
気にする人はいねえども、こういう鳥が集結する只見はやっぱりタダモノではねえな。 イサム

10.24 秋、花ざかり

この花をはじめてみたとき、どこか日本ばなれしてるとおもった。日本の植物というより、異国風な感じ。ナンバンハコベという和名は言い得て妙。

イサム



10.25 伊南川のオスプレイ

伊南川を横切る電線さ、1羽のオスプレイ。あたりをキョロキョロ見渡している。2羽でいるときもある。つがいだべな。止まる位置は、いつもおんなじ。



ある日のこと、1羽のオスプレイがなにかつかんで食ってる。でっかい魚だども、魚種は不明。魚ばっか食って、栄養が偏よんねだべか？ カワウも20羽前後いっとも、この川、けっこう魚が豊富なんだわな。 イサム

10.28 ノスリを追いかける

外さ出たら、上空で円を描いて飛ぶ鳥発見。「トンビかな？」と思ったが、よく見るとまるい尾、羽ばたきを交えた滑空。「ノスリだ！」
すんま家さもどってカメラをもって追いかけた。しかし、ちいっと止まっただけで、しつこい奴がきたなというふうに飛んでいっちゃった。ノスリは、

奥山から人里までふつうにみられる猛禽。これで、目の虹彩が黄色だったらほんとにカッコいいのにな。 イサム



11.2 イヌワシだ！

山の頂から突然でっかい鳥影が出現した。幅広い翼、掌状に広がる翼先、なにより貫禄たっぷりの飛翔。全身黒いから成鳥だ。翼を広げれば2mを超える。滑空しながらしだいに高度を上げていく。姿を見られたのは5分間ほど。だども、それで十分。たいていは数十秒から2、3分どまり。それでも見られるだけラッキー！絶滅危惧種IBだけあって出会える機会はめったにない。

只見は国内でも有数のイヌワシ生息地。イヌワシは、生態系のキーストーン種ともアンブレラ種ともいわれ存在自体が、生態系豊かな自然がある証なのだ。

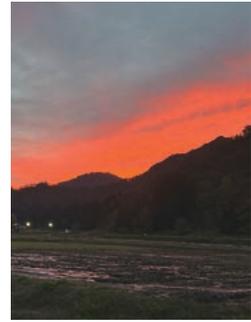


写真をよく見てくんつえ。黄色い脚を出してっぺや。飛翔中、脚は体のなかさ引っ込めるもんだが、これはひょっとして獲物をつかんでだんでねえかと思う。オラのカメラのレンズではこれが限界。うー、まっとういい望遠レンズがほしーい！ イサム

11.6 真っ赤な夕焼けはめずらしい！

只見は山が近くさあつから、太陽は黄色いまま沈んでしまう。だから夕焼けはなかなか見られねえ。そだ只見にいて、きんなの夕焼けは特別だったな。画面左側が只見駅。写真の加工はしてねえずや。

80年前、長岡空襲があったとき、西の空が真っ赤に染まったと聞いていたが、こんな感じだったと思う。 イサム



12.13 やって来ました！

雪の朝の楽しみ、今日のイチオシはニホンリスでした。クリの木に登ったり降りたり。こんなことが毎日の様にあるから、只見の冬は退屈しません。雪掘りはキツイけど。 みゆき



12.17 オオコノハズクじゃー！

オオコノハズクだぞや！なんとネズミを捕まえてんでねーの。感動的なベストショット！



20時15分、荒島集落さ通じる県道上で撮影された。写真の提供者は、役場職員のみ黒氏。仕事帰りに出くわしたという。ライトを浴びても逃げようとしな^しれ^ないのは、ネズミを捕えた直後だったかもしんにえ。猛禽は獲物をいったんゲットすと、その場を離れない。オオコノハズクは、30年前、同氏の母上が自宅の作業所に迷い込んだのをオラが確認に行ったことがある。それが只見町初記録だった。こんだは、その息子さんが、ネズミを捕らえたオオコノハズクを見つけた。因縁を感じるな。オオコノハズクは留鳥だが、雪の深い只見ではいなくなると思いきや、どっこい冬になってもたくましく生活してんでねえの。 イサム